

投稿論文

国分一太郎と『綴方生活』

—— 小砂丘忠義との関係を中心に ——

飯田和明*

A Study of KOKUBUN ICHITARO in “TSUZURIKATA SEIKATSU”:
mainly in relation to SASAOKA TADAYOSHI

Kazuaki IIDA

戦後生活綴方教育の復興に当たった代表的人物の一人である国分一太郎は、戦前の綴方雑誌『綴方生活』から学び、自身の実践を啓いていった。しかし、戦後にわたって国分は同誌に距離を置いた立場を取るようになる。このことは、生活綴方教育の源流である小砂丘忠義の持っていたエトスの戦後への継承という視点からすると、国分個人の問題に留まらない教育史的検討が要される課題である。本研究では、主に『綴方生活』誌において国分が同誌や小砂丘をどのように見ているかを検討することにより、その理由を検討する。特に小砂丘没年に当たる1937年1月発行の『綴方生活』掲載「『綴方教師の悩み』について」（国分）等の分析から、その「悩み」の内実が、文章指導と生活教育の位置付けの問題であったこと、ときに形成された国分の言語観が、小砂丘と『綴方生活』の理解を妨げたこと、及び「国分の語り得なかったこと」が、小砂丘によっては捉えられていた言語の他者性にあったことを示す。

1. 課題の所在

山形の青年教師であった国分一太郎は、昭和戦前期における綴方雑誌『綴方生活』を読み、そこに生活教育としての拠り所を求めつつ自身の綴方実践を啓いていった。同誌の主幹、小砂丘忠義は、1937(昭和12)年に40歳という年齢で亡くなり、その死をもって『綴方生活』誌も終刊となる。その後国分は、戦後の日本において生活綴方教育を復興させるに当たり大きな役割を果たした人物となるが、『綴方生活』誌に対しては、距離を置いた見方を呈するようになる。それは、時を

*宇都宮大学

隔てた一種の客観視と見ることができるかもしれないが、生活綴方教育の源流と言える小砂丘忠義の持っていた理念、エートスの戦後期への継承という視点からすると、国分による見方の変容は、単なる個人的な問題の域に収まらない、生活綴方教育史の解釈に関わる部面としての課題となる。

国分による生活綴方教育継承に係る課題については、菅原（2007）が、国分の著作『新しい綴方教室』を評して、

『新しい綴方教室』で述べられている作文・綴方教育の全てが、戦後の「新教育」に即したものではない。むしろ、一方で、戦前のわが国において大きく花開いた作文・綴方教育の理論・実践の到達点と成果を確実に継承しながら、また一方で、その新たな展開の可能性や方向性を、戦後教育の中に位置づけようとしたのである。

と述べるが、太郎良（2011）においては、

国分は、戦前生活綴方教育関係者の一人であり、戦後において戦前生活綴方教育の紹介をした代表的な人物である。その紹介にあたって、一般的にみても紹介者の生活綴方教育観が反映することは当然のことであるが、国分の場合は、紹介にあたって取捨選択をおこなっていることを自らが明らかにしている。

との指摘があり、戦前から戦後への継承という観点における教育史研究としての理解の多義性、あるいは疑義が示唆されている。また、佐内（2012）では、

平野の「綴る生活の指導法」について、大内善一は「昭和戦前期綴り方教育の到達点」と評価している。しかし、国分の『新しい綴方教室』をはじめとする「戦後の華々しい生活綴り方復興という現象は戦前の綴り方教育の到達点を亡失せしめてしまった」と批判している。（「昭和戦前期綴り方教育の到達点とその継承を巡る問題」東京学芸大学国語国文学会編『学芸国語文学』第二八号、一九九六年三月／『国語教育科学への道』二〇〇四年三月、溪水社）……このような国分への評価を行うためには、昭和戦前期における綴り方教育の到達点を、より正確に把握する必要があると思われる。

と、大内による批判を引きながら、国分への評価を与えるためには、戦前期生活綴方研究のさらなる展開が期待されるとしている。

筆者は、小砂丘忠義の綴り方教育が戦前期生活綴方教育の到達点としての理解に

応えるものと見ている¹⁰が、国分の評価に関しては、彼自らが生活綴方教育の出発点と位置づける『綴方生活』における論述をたどることが重要であるとする。国分の『綴方生活』に向ける視線や思いを確認し、それは小砂丘からどのように捉えられているのかを伺うことは、国分が戦前において抱いていたものが、どのように戦後にわたって通底していくのか、それは小砂丘との関係からはどのようなものとして評価できるのかと考えることにつながる。そしてそのことは、従前の国分に関する研究が十分に捉えることのなかった側面に目を向け、さらに戦前・戦中から戦後における言葉の教育の問題を、現代の教育に係る課題として考察する視界をもたらすと考えている。

2. 『綴方生活』誌における国分一太郎

模範的學生として山形師範学校時代を過ごした国分は、その在学中に『綴方生活』誌を知り、強い関心を抱いて講読を始める。そして、赴任校である長瀬尋常小学校で取り組んだ綴方教育実践を同誌に投稿し、さらには執筆した論文が掲載されるようになっていった。彼が『綴方生活』から受けた影響は大きなものであったと言えるが、その過程を国分の記した文言から確認していくことは、同時に、この時期に国分自身の生活の中で起こる出来事が、彼の立てようとする理念を時に乱し、時に一定の判断を伴って形作る様を確認することにもなる。以下、「『綴方生活』と僕と地蔵尊と」（『綴方生活』第七卷第一号 1935.1）から、いくつかの文言を引いて検討してみたい。

兄貴の童話がいつものつてゐる綴方読本の前身「鑑賞文選」を知り、それを師範の四年甲組に共同購入を企てて、失敗したりした。間もなく「綴方生活」の創刊号の青表紙を私は本屋の店先から買へるやうになつた。地蔵尊と語る事がだんだん綴方の事になつて来て、私は小砂丘先生を知り、野村芳兵衛といふ名を覚えた。

「兄貴」（村山俊太郎）との交流から、『綴方教育』の子雑誌である『鑑賞文選』を知るところとなり、学校にそれを持ち込もうとしたこと、小砂丘、野村を知ることになる端緒がここでは述べられている。そして、

生活教育について私は誰の本も読まなかつた。「綴方生活」のうすつべらな頁から、みんな聞いてゐた。

という部分からは、国分がこの後、自身を賭けて取り組んでいく「生活教育」の

発端を確認することができる。教員生活を続けていく上での状況については、

その頃私の村は農民運動が起りかけてゐて、私の級の子供の算術帳からは、子供ニユース等も見つかるやうになつた。一部の上級生達は革命歌もうたひ、巡査さんの事を官犬といひ、電柱掃除人といふやうになつてゐた。学校でも苦しみ、県当局でも心配した。私達は思想善導に意を注がねばならなかつた。「綴方生活」で例の志垣寛がかいた「教育者は蝙蝠なりや」なんていふ記事が私の上の問題となつて来た。

のように記され、この懸念は1932年、村山俊太郎（以下の引用では「地蔵尊」）との関係による検挙、取り調べという具体的な事件となつて現実化する。

もがきつづけてゐたあげくが、翌春地蔵尊も私もほろにが味をなめねばいけなかつた。それ以後地蔵尊のまはりには、子供達がよつてたかる事も出来なくなつた。私は、今は亡くなつた祖母と父母と七人の弟妹達の待つてくれた貧しい家にかへり、僕の帰校を村社参拝をして祈つてくれた五十人の子供達には拍手でもかへられてたゞ涙する外はなかつた。そして日本の、長瀨の子供のために、生活開拓のために、使用に堪へないと言はれる日までは働く決心をした。小さな、観念的な懷疑でもがいたりする事よりも、生活にあたつて、仕事の上で苦しみもがいて行かうと思ふのだつた。目前の子等の生活の具体の中に真実を求めて行かうとした。

国分は家族の元に帰り、子供達の所へ戻る。そして、「小さな、観念的な懷疑」よりも「生活」に当たり、「目前の子等の生活の具体の中に真実を求めて行かう」とする。その際には、綴方が有用であつた。「生活のための綴方」の必要性を、彼は繰り返して述べている。

昭和七年四月から、私は尋三のもんぺの子供達と出発した。野村先生の「尋三、自然観察、生活観察による綴方プラン」があの場合一番いいのであつた。僕は綴方のための綴方や、綴方らしい綴方よりも、生活のための綴方が欲しいのだつた。生活教育の実践部面をいつも綴方の中に見出さうとした。綴方は生活の勉強だといつてスタートした。生活技術として生活の道具として綴方を用ひたいと思つた。

しかし、国分の小砂丘、『綴方生活』に対する見方は、少しずつ変化していく。

あんなに早くから教へられてゐながら、小砂丘忠義先生には一片の忠義をつくした事はなかつた。それでも「生活」が出なくなつたりすると「俺

たちが誌代を送らんからだ」と、ふと思つては一金貳拾五銭の振替をくんでもらふ私であつた。

と、小砂丘に心を寄せ、

僕が今貧弱な姿で、教育を、そして綴方をやつて行ける方向を与へてくれたのは、もともと「生活」であつた。「生活」は私の故郷だと私は誰にはわかる事なく素直に言へるのだ。たゞ僕が「綴方生活」を私の故郷だと思ひ育てられた土だと思ふのは「綴方生活」が私に、清新な「生活教育の信念」を教へてくれたからだ。単なる綴方らしい綴方でなく、真に生活をたゞき上げる綴方を教へてくれたからだと思ふ。単に感情的に精練された人間ではなくて、正しい生活文化へ協働する意義と技術とにきたへあげられた人間的信念の必要を「生活」は教へてくれた。

と、「生活教育の信念」を教へてくれたとまで述べる『綴方生活』に対して、

そして小砂丘さんよ。綴方生活の南瓜はまるまると熟れてゐるでせうか。

綴方への、そして教育への出発期に於いて、一箇の人間が受けた、これほどの感激をこめて回想し得る示唆性を今の「綴方生活」は、果たして持つてゐるでせうか。人生の幾分の一かを許された睡眠時間もゆるゆると寝る事はない程忙しく、そして自分一個の囃り方さへも確立する事が出来ない程、経済的にも苦難せねばいけない小砂丘さんよ。なぜ「綴方生活は熟れたり」とは言へないのでせうか。育てた者も、育てられた者も、反省は両者にあるのではありませんか。

と、現在の雑誌の在り方に疑義を差し挟んでいくのである。国分の教育者としての信念を形作ってきた『綴方生活』は、当時の彼の実生活と、目の前にする教育の現実から見ると、それは「郷愁を感じ」るものとして映っていくのである。

回想の夜中を、こほろぎが鳴いて、貧しい生活がかたまつて寝る習慣となつた僕の父母や弟妹達は、肌寒の今夜もしつかりと寄り添つて寝てゐるのだ。上の句を忘れた「南瓜まるまると熟れにけるかも」の歌を口ずさんで、僕は「綴方生活」に郷愁を感じてゐるのだ。(昭和九・九・二九)

ここに垣間見られる国分の、時代の状況性と密着したものとして現れる、いわゆる「転向」を巡って揺れ動く姿、子供達の現実へ寄り添いながら、時代の圧力の中で自分の思いと生活を守り、作つていこうとする国分の姿は、ごく普通の人としての生き方であるように思われる。

一方で、国分を知ることになる小砂丘は、『北方教育』等、国分が関与する綴方教育の動きを評価し、期待をかけていった。

……本年の綴方界で注目すべきは、すでに二回に亘って村山が論評してゐる北方綴方人の「北方性」への自覚と、その確立への緊密な結合である。これは一頃花ばなしく登場した郷土主義と轍を異にした根強いものであつて、その業績は必ず我らの日常実践に寄与するものを齎すべきことを信じて疑わぬ。我我はこの考究に又一个の期待をもつて昭和十年を迎へようとする。(小砂丘1934.12「昭和九年を送る」『綴方生活』第六卷第四十四号)

……僕の北方性に対する最大の期待は、その水平線上に現はれて来た現はれ方の真実性にかかつてゐる。北方教育人がこれに自覚して自らこれをもりもりとより上らせた—即ちこれも北方性の一特性である—ところに僕のいちづな共鳴がある。(小砂丘1935.2「綴方に於ける地方性について—南方・殊に土佐の諸君に—」『綴方生活』第七卷第二号)

小砂丘は、自身にとっての郷土、土佐の教育と引き比べても高い評価を与え、「日常実践に寄与する」現実的实践として、「現はれ方の真実性」を持ったものとして、「いちづな共鳴」を伴う、大いなる期待を寄せている。同年7月の『綴方生活』で、国分が以下の言葉を記しているのは、この時期の二人の関係を見る上で非常に示唆的である。

……生活様式の大異を忘れて、単なる言語の駆使にのみ追従する時、そこには、真実の内容をはらまぬ言葉への努力、即ち観念主義、形式主義への模式的転落のみが待つてゐたのであつた。……然るに己達の生活台の実体をうち忘れて、既成の文化技術（こゝでは言語、文章）のみへの追従に走る事は、明らかに、言葉を生活と共にあらしめる事ではなくして、逆に「生活をすでにある言葉へ近づけて行く」遊戯に過ぎず、ひいては北方的生活現実から逃避して、爛熟せる文化への敗北的降伏を約束し、最後にはそれと共に、崩壊の運命を共にする暗き方向へ向ふ事に外ならない。(国分1935.7「その態度」、国分一太郎 高橋啓吾 大竹重信「國語実力への北方的工作」『綴方生活』第七卷第七号)

ここに見られる「生活台」という生活綴方教育を語る上でのキーワードの表出、また「言葉を生活と共にあらしめる事ではなくして、逆に『生活をすでにある言葉へ近づけて行く』遊戯に過ぎず」等の文言は、国分研究に留まらず、生活綴方

教育における「言葉と生活との関係」を捉える上でも重要な部分であり、この時期の国分と小砂丘に相通じるところの、教育に関する深い認識を読み取ることができる箇所である。

次いで取り上げる『綴方生活』（1937.1）掲載の『「綴方教師としての悩み」について』（国分）と、「昭和十二年を迎へる」（小砂丘）は、この時点での国分の『綴方生活』に対する認識と、小砂丘による国分への見方を知り、両者をつないだ考察を始めるために、詳細な検討が加えられるべき史料だが、ここにも二人の共振を見ることができる部分がある。

教育の仕事は観念的な部面を多分に持つものらしい。……要するに問題となるのはその観念如何にある。「三つ子の魂百まで」の俚諺は、ここで拍車ともなり手綱ともなるといほう。たへず現実を見つめて進むことが、唯一無二の道である。僕はしばしば「科学的綴方の行詰り」とか「北方性も行詰つた」などの言葉をきき、世にも観念的なことの嫌いな勇壮？なる綴方人の意外にも観念的であり、なさけないこの敗退ぶりに驚いたものである。……「科学的綴方の行詰り」にせよ「北方性（マ）にせよ、之をそのままに萬古不易の金科玉條としようなど考へてはいけない、瞬時も進行を止めることなく社会は動いてゐる。その動きにつれて修正し躍進して行く所にこそ若さの意味がある。（小砂丘）

この文言には、「動く」という、小砂丘綴方教育の基本構造（飯田 2012）を描くに当たって重要な語が含まれているが、「教育の仕事」における「観念」について小砂丘が語っていることにおいても重要性が存する。それは前述した、国分（1935.7）の「観念主義、形式主義への模式的転落」に通じる視線である。

国分の『「綴方教師としての悩み」について—あまりに平凡な一面的な—』は、その標題からしても、心情吐露的な、自身の弱さをさらけ出すような書かれ方がされている論文であるが、

……私の綴方教師としての悩みなども、自分ばかりが眞実の悩みを悩んでゐて、その他の綴方をやらない教師なんかは悩みもしないとするやうな、したがつて、自分たちだけが世界の苦悩を一身にひきうけて顔をしかめ、あはれな子供を翼の下に抱いて荒い浪風の前に嘆息するといった風な、當世風の、綴方教師的の、まことに英雄的な、将又慈善家風なものではないのであります。（国分）

には、この論文を『綴方生活』誌に掲載するに当たり、「綴方人の意外にも観念的であり、なさないこの敗退ぶり」(小砂丘)には相当しない、観念的なものでなく、真性の悩みをもって山形で苦闘している国分を認め、受け止めようとする小砂丘の姿を重ねて想起することができる。

3. 戦後期にわたる国分一太郎と『綴方生活』

これまでの検討を元にして、戦後期にわたって発せられた国分による『綴方生活』誌や生活綴方教育に向ける言説の意味を考えてみたい。そこには、基本的に戦前期の生活綴方教育、特に『綴方生活』に対する距離が認められる。

国分一太郎(1957)「抵抗の人間像とそのための教育運動—初期生活綴方運動と抵抗の人間像」では、以下の記述がされている。

『綴方生活』はやがて、思想上の対立から、その発刊者たちの変更、出入りを見るのであるが、終始全国各地のわかい教師達をひきつけていたのは、小砂丘忠義の無政府主義的世界観からする反官僚主義と「原始子供」を標語とする子どもの野生尊重の精神、野村芳兵衛の新功利主義と科学主義、共同性を標語とする手段主義的道德の唱道等であり、また、彼と峰地光重との間にいちじるしい一致点を見せる生活科としての綴方の実践であった。

当時の国家権力がめざす教育勅語中心の教育目標には反抗をこころみるけれども、さればとってプロレタリア教育運動のようにはその色彩を明確にせず、いわば無政府主義・社会民主主義を基調とした社会意識・精神的傾向を持つ子供たちを育てるところに、漠然とした願いがこめられていた、ということができらるであろう。

『綴方生活』誌に集った者たちの多様性を表すこの評言は、彼らを、当時の状況下にあつて「抵抗」する群像の一部として、しかもその旗色が鮮明ではない者たちとして、国分が認識していることを示している。

時を隔て戦後へと大きく時代が変わった中で、二十年前を回想する文言を閲するに当たり、その間に存する国分の個人史を確認していくことも有効であろうが、戦前期において『綴方生活』が「清新な『生活教育の信念』を教へてくれた」と言い、「観念的なること」から身を置き、小砂丘と共振もしつつ、しかし「僕は『綴方生活』に郷愁を感じてゐる」と記していた、その当時の国分の言説を、戦後

に彼が発した言説とつなげる視野の元に丁寧に見ていくことは、研究上欠かせない手続きであると考える。

本件を考察するためには、まずこれまでの国分に関する研究がどのような意味合いにおいて為されてきたかについて確認する必要がある。そして、戦前の『綴方教師としての悩み』について」の中で国分が吐露したところの「悩み」の内実を、従来とは異なる視点から見ていくことが重要になる。太郎良（2011）は、当時の国分が綴方の教育を「文章表現技術の指導に絞る主張」として展開した背景に着眼し、

国分は、文章表現技術の指導に絞る主張の背景について、かならずしも生活綴方教育への弾圧を避けようとしたわけではないというもの、弾圧を予想して「転向」「倒潰」しはじめたことによるという二通りの説明を示しているということになる。そして、二通りのうちいずれの説明であっても『綴方教師としての悩み』について」等が弾圧を回避しようとしたものか否かという問題が、当該論文の筆者である国分から提起されているということである。

とし、史実を提示しつつ、史料としての国分（1937.1）に研究上の新たな位置付けを与えている。

国分が生活綴方教育批判を各誌に書き続け、視学が最もマークしていたという『綴方生活』1937年1月号にも生活綴方教育批判を書いたのは、視学等の心証をよくするためのものであった可能性がある。ちなみに、掲載された翌月、『綴方生活』1937年2月号をうけとった2月22日の日記には、「『綴方生活』2月号つく。気持ちよいザッシではなくなつてしまった」（太郎良注：国分一太郎「『生活綴方』の運動と『生活学校』の運動」『教育』1952年3月号、374ページ）と記すほど、『綴方生活』に対して距離を感じ始めていることが判明する。（太郎良2011）

このように太郎良の論考では、国分が最重要としていた「生活教育」を、国分自身が批判することの意味に関する検討が、彼の感情面にもわたって進められている。

筆者も、国分が率直に「悩み」を打ち明けているとも見えるこの論文（国分1937.1）に注目している。次の一見些細な部分とも思われる文言から、検討を始めてみたい。これは、「以上、」とあるように、論文の最後に付言のようにして記されたものである。

以上、悩みに値せぬとも思はれる悩みを、臆面もなくさらけ出して人々に笑はれたいとおもひます。こんなことは、この誌編集者小砂丘氏の「文章記述の常識四十銭」をよめば氷解する、つまらぬ悩みだと人はいふかも知れません。だから私は初に断りました。(筆者注：「初に断りました」に当たる書き出しの一行＝「いとも華麗なる悩みなどがききたかつたら、ひとびとよ、この駄文をおよみ下さいますな。)」

当時の小砂丘は『綴方生活』誌上で、さかんに「文章表現技術指導」を取り上げており、『文章記述の常識』(1936 文園社)という小本を出版している²⁰。

国分が、論文の最後に「この誌編集者小砂丘氏の『文章記述の常識四十銭』をよめば氷解する」と記しているのは、この時点においても国分が小砂丘に拠っていることを伺わせるのに加え、「生活教育」を学んだ『綴方生活』、その主幹である小砂丘が「文章記述」の重視を体現したと見える著書を、論文の最後に取り上げざるをえない、国分の複雑な内面を表していると思われる。すなわち国分の「悩み」の内実は、「文章指導と生活教育との関わり、位置付け」にあったのではないと思われるのである。

この見方を以て、以下「悩みについて」(国分)を分析してみたい。

……綴方では「文字といふ道具を使つて思想や感情を、他人にわかるやうにかく」といふ立場からだけ、私は今度うんと悩んでみたいと考へてゐるのです。

と、文章指導(で悩むこと)によって、これからの綴方指導を進めていくと記す国分であるが、その後には次の記述が続く。

その思想や感情の内容そのものについての悩みや、その悩みのよつてくる根源的なものについての悩みなどは、生活教育全般の悩みとしてしか、あるひは躍進日本国民の悩みとして、気永に忠実に、萬機公論風に、多くの人々と悩みを共にしたいのです。……あらゆる文化事業や社会事業、社会政策にも眼をみはるつもりです。小國民教育に必要な限りの社会国家の動きにも注目するつもりです。ですから、この綴方教師は貧弱な悩みしか悩まぬことになるのでせう。そのかはり、この教師は、他の部面ではいろいろなことに悩むかも知れません。

ここに示されているのは、「生活教育全般の悩み」は、悩むという国分の見解である。「躍進日本国民の悩みとして」「萬機公論風に、多くの人と悩みを共有した

い」等々の枠を付しながらも、やはり生活教育については悩み続けたい、「他のいろいろなことに悩むかも知れません」とする、国分としての心情がよく現れていると見えるのである。

さらに筆者が注目するのは、次の文言である。

そして私は悩む基準を、そもそも小学校が建設されるに至った明治五年の太政官例第二百十四号におくことが大切だと考へるのです。明治大帝の大御心にそふやうな立派な教育を、六十余年後の今日、私達は果たしてなしてゐるであらうかと私はいつも悩み続けるのです。……これを、綴方教師の責務としてみる時は「明ラカニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ」であります。文字表現を正しく、明確にさせることであります。

ここには、先の「小國民に必要な限りの」に加え、「明治大帝の大御心にそふやうな」といった転向に関わる語も現れているが、それ以上に筆者が問題としたいのは、国分が「思想ヲ表彰スルノ能」を取り扱うに際し、「文字表現を正しく、明確にさせること」が「綴方教師の責務」としていることである。ここで国分は、「思想」を「文字表現をさせる行為」とは分けているように捉えているが、実のところは、その両者は分かれてはいない。言語が、その指し示す内容に音や文字が結合することで成り立つという言語学の基本的な認識に言及するまでもなく、特に思想、気持ち、感情というものは、それを表す言葉を選び、それを発することによって、その言葉の指し示す意味を、言語使用を行使した当人に与えることになる。しかし、国分はここでそれらを捨象し、言語の内容と形式を分け、形式面を扱うことで彼自身を納得させようとしているように思える。この様態は、次の言辞にもよく現れている。

今から数千年の昔の人間が、文化交通の道具として發明し、使用し、駆使してゐた、文字表現、これを文運はなやかな今日、進化發達せる人間が使ひきれずにゐるといふやうなことは、けつしてあつてはいけない筈なのです。けれどどうでせうか、私の身近くゐる子供達などは、なかなかそれさへも出来ないのです。誰にもわかることばで、字で、すらすらと、思ひのまゝを思ひのまゝに、観たまゝをみたまゝにかくことさへもできないのです。

これは、現実に目の前にした子供達がまともに文も書けない、だから、何よりもまずはきちんと文字が使えるようにしなければならない、という文脈で読むこ

とも可能な文章である。しかし、着目すべきはここで語られている国分の認識であり、それは、「文化交通の道具」としての「文字表現」によって、人は「思ひのまゝを思ひのまゝに、観たまゝをみたまゝにかくこと」ができるという言語観である。言語の形式面を整えさせることで、内容面もきちんと表出させることが可能になるという言語観、言語教育観を、国分はこの時期に持ってしまったと考えられる⁹⁾。

4. 国分の「語り得なかったこと」と教育の研究

戦前から戦後を通して、時代と個人の事情における複合的な要因が絡んだ結果として形成された国分の人となり、彼の教育に関わる変転を伴うその実践に現れていると見られる。小砂丘の死の翌年、『教室の記録』出版の関係で教師を免職となった28歳の国分は、南支派遣軍報道部に勤務し、広東へ赴任して『戦地の子供』を執筆、翌年にそれは中央公論社より出版され、文部省の推薦を受ける。この著作について、津田(1986)は以下の記述部分を取り上げて国分を論じている。

国分は、右「序にかへて」で、就中こういつているのだ。《私が書く広東の子供たちは、はじめは、まことに悲しさうな、さびしさうな顔ばかりを見せるかもしれません。けれどもだんだん読んで行くうちには、笑ったり歌ったりする子供たちがぼつぼつ顔をみせるのでせう。これは日本軍の建設の仕事がだんだん進んできた証拠なのです。このたびの事変の目的は、けっして支那国民を相手にしたのではなく、共産党と手をにぎってゐる蒋介石をうち、東洋の平和を建設しようといふのです。……軍隊のために働いてゐるといつても、私は、じつはそのニッコリさせる方の仕事を、軍隊の人と一しょになってやってゐるのです。……今こちらの大陸でも、天皇陛下の軍隊はもう二度とこの東洋を戦地にしたくないために、最後の戦争をしてゐるのです。命を捧げて働いてゐるのです。》(津田1986 pp. 225-226)

この書に対する津田の評言は、当時の国分の在り方を端的に指摘していると思われる。

『戦地の子供』を中央公論社から上梓し、それがかなりの評判をとって以後、はっきりと職業的著述家への道を目ざしていたと思われる。当時あって、それはそのまま「時勢にのかってしまう」(国分、前出；筆者注

(『小学教師たちの有罪』)ことを意味した。国分もそのことを自覚していたであろう。自覚はしていても、おのれに対しおのれを鞫晦させることで、それはやがて本音とならざるをえない。そして、それは、生活と思想的自己了解の両面からの国分的必然以外でなかった。(津田1986 p.246)

筆者としては、この件を「国分の語り得なかったこと」として論じることが有効であると考ええる。まずはそれを、この『戦地の子供』という文章を、国分が書き得たことの意味」を考えることから始めてみたい。

先に見た国分の言語観においては、「道具として發明し、使用し、駆使してゐた、文字表現」を、「人間が使ひきれずにゐる」が、それを使いきることができれば、人は「思ひのまゝを思ひのまゝに、観たまゝをみたまゝにかくこと」が可能になるとされる。国分は『戦地の子供』の執筆において、自らそれを体現したわけである。すなわち、国分が彼自身の言語観のもとに文章を書き得た成果が、『戦地の子供』という著作に結実したということになる。一方で、確かに津田の指摘するような「自覚」はあったかもしれない。しかし、「おのれに対しおのれを鞫晦させることで、それはやがて本音とならざるを得ない」(津田)。換言すれば、国分の言語観によって現出せられた国分の文章において、彼が「道具」として使ってきた言葉に、今度は、自分自身が使われてしまうのである。思想、気持ち、生活…と、分けて考えられていた「文字表現」が、文章として著されたことによって、その使用者である彼自身を縛る。その理由は前述の通り、実際には二者(言語における内容と形式)は、その言語使用において、分けることができないものだからである。

戦前・戦中の時期に国分が得ることとなった彼の言語観は、戦後においても引き継がれている。『現代つづりかたの伝統と創造』(1982)の中で述べられる次の文言は、先に引用した、戦前の「悩み」を語った論文での言辞と、その意味合いが酷似している。

わたくしたちは、「単なる表現技術」などといわれるような表現技術ではなく、あたりまえな表現技術をことのほか重視するのだといってよい。べつないいかたをすれば、「形式主義的な表現技能の指導」ではなく、文章表現における正しい形式の指導を、表現技術の指導としてづづけていくのである。(国分1982 p.154)

「文章表現における正しい形式の指導」は、国分によっては「単なる表現技術

の指導」と分けられているようである。「形式主義的な表現技術の指導」を措定することによって、国分は自らの言語観を、ここでも直視できないままでいると考えられる。

この変わらぬ国分の視界は、戦後の国語教育批判においても踏襲、適用されている。

……文章表現による教育で、全体の教育が向かうよい方向に寄与していくものとすれば、文章というものには内容と形式の両面をふくむものであるから、内容と形式の両面にわたって、わたくしたちは適切な指導をしなければならぬ。ここのところに、つづりかた教育の責務がある。内容は、社会科や文学の教育にやってもらい、形式はつづりかた教育でやる。こういう考え方はまちがっていた。これを、わたくしは反省する。そして、この反省に、それほど手間取らなかったことに、わたくしたちはホッとす。国語科＝よみ方・つづり方を、道具教科・用具教科とするアメリカ的国語教育観に不満を持ち、内容・形式両方をともに大事にする生活つづりかたの考えを復活させることができたからだった。あれから三〇年。いままた文部省は、かつての道具教科や用具教科説のうすっぺらな「子ども」「孫ども」といってよいやつを、言語技能主義として、日本のなかにはびこらせようとしはじめた。わたくしたちは、これと、あくまでたたかわねばならぬ。(国分1982 p.155)

国分はここで、内容と形式を分けた考え方を「まちがっていた。これを、わたくしは反省する。」と述べている。分けてその片方を行い、もう片方を行わないことと、分かれていないものを、どのように取り扱うかということとは違うはずだが、国分は「内容・形式両方をともに大事にする生活つづりかたの考えを復活させることができた」として、その省察には入らないまま自得してしまっている。彼が戦前期に『綴り生活』で開陳した「悩み」は、ここでも解決はされていないようである。その「悩み」の内実は、先に論じたように、依然「文章指導—生活教育」を巡る「悩み」である。

最後に、国分と小砂丘の言語観の違いについて、確認しておきたい。

文章表現による教育をするとき、言語による表現では、自己の心の内部や他人の心の内部を「対象化」しやすいことに目をつけてきた。自分の心や他人の心、その内部までも「書く対象」としやすいとして、それに目

をつけてきた。同時にそれを表現しやすいことにも着目してきた。絵画表現などには、自分の心や他人の心をしみこませること、描きつくすことはむずかしい。けれども言語による表現ではこれができやすい。このところを好機と考えて、「自分の心のことも書け」「自分がわかり、推察できた他人の心の中のことも書け」と、子どもたちに呼びかけてきた。(国分1982 p.136)

共存共栄とか、不即不離とか、そんな言葉で表す気持ちもわかるにはわかるが、そんな言葉になつて私の前に表はれる境地はまだどこかに個と個との対峙が予想されてしつくりこない。人と人々が理屈をいつたり物語りしたりしたりする時、私はそこに、心の底からうなずき合へない淋しさを覚える。言葉のそれは本質的不備であると共に、言葉の上にもものを見んとする悲しい人間の浅さでもある。「静かさとはその物があるべき地に安定された落ち着きである」といつてゐた私自身の言葉を考へてみるとやっぱり此感じを深うする。言葉について考へねばならないことは、ひとり小学校の綴方ばかりではない。(小砂丘1926「眠らぬ寝床」)

言葉の「本質的不備」という小砂丘の指摘は、言葉はそれを用いる者にとってさえも、思い通りにはならないこと、さらにそれが、他の人に伝わる時には明らかにならざるを得ないことを意味すると考えられる。ここには、言語に他性(他者)を認める小砂丘の言語観が現れていると見られるのである。

「国分の語り得なかつたこと」は、この「言語の他者性」であつたとまとめることができるだろう。「自己」概念と「他者」概念は、中内敏夫(1970)等によって示唆された生活綴方教育を検討する上で非常に重要な概念であるが、それは未だ研究の上で十分に取り入れられているとは言えない状況にある。国分一太郎に関する研究にも、それは当てはまると言えよう。国分自身が、戦前の「悩み」に始まり、戦後においても揺れる自分自身を率直に(ある時には矛盾するような形を以て)、度々著していることは、この観点に照らせば、実は彼を研究する際の障碍ではないのである。

なお、上記の結論を本論文で得たことは、必ずしも国分一太郎の綴方教育における実践や理論の価値を軽んじることにはならない。小砂丘が自身の死の間際にも認めていたように、国分はその時の状況に当たり、観念的に抛らず、目の前の現実を受け止めて、率直に物事を考え、自身の生活を生きようとしていた。故に、

彼の持っていた一種の弱さを隠さないことが、国分研究の上でも肝要となるのではないか。逆に、何か強く、支えとなり、揺るがないといった見方を過度に適用させることが、国分、ひいては生活綴方の研究が現代に活かされる道を狭めてしまうように思われる。人間という元来弱さを持つ存在が、時に悩みを抱えその解決を求めつつ、日々の生活を営み、ある者は教育の仕事を行っていく。教育という営みはそういう普通の人が行っていることであり、そのことはある意味通常で、正常でもあるとも言える。国分の戦後教育界における仕事の重要性は、時代と密着したところで現れ、常に「転向と抵抗のはざま」（津田）にある自身を反芻しつつ、子供の立場に寄り添って教育論を発信し続けたところにある。本研究では、戦後における国分の言動の動き方の詳細にまで触れることを意図していないが、戦後に国分が発した言辞を、いわば都合良く引き合いに出して、そこから折々の理想的な教師像や教育像を描こうとすることには、注意深くあるべきだろう。そうではなく、国分の「語り得なかったこと」に目を向けながらその為し得た仕事を見ていくことが、教育研究に実質的に資するものになるのではないか。そのためにも、国分が抱いた「悩み」を、最初に彼が目を開かれ、実践と論考を発表していった『綴方生活』の中に認め、そのことの内実と意味とを、同誌の主幹、小砂丘忠義に照らして考察していくことが重要になると考えられる。

註

(1) 筆者による小砂丘忠義研究における重要な件を、二点挙げておく。一点は、「自己」と「他者」の分離に始まる小砂丘綴方教育の基本構造の指摘であり、もう一点は小砂丘の持っていたと考えられるエトスの析出である（いずれも、飯田2012より）。

①小砂丘における「自己」とは、一度明確に「他者」から分離されたものであり、その「自己」は「他者」を前にして十全に開いている状態であることが確認される。この「他者の受容」によって小砂丘の重視する「動く」という事態を取り込み、「新しき自己の意識に生きる」ことを目指す小砂丘綴方教育の基本構造を、以下のように描いている。

「自己」と「他者」を一度「分離」する。

「自己」は「分離」された「他者」を受容する。

「受容」の際、「動く」ことが「自己」の側に生じる。

「動く」ことによって、「自己」は「新しい自己」となり、「創造」が生まれる。

②相対的自立性

小砂丘は子供の原始性を単に求めるのではなく、「自己」を新たにするために「他

者」を受容する際の「動き」を重視していることが確認されるが、さらに小砂丘は、「自己」において「他者」を受容するに際しそれは大いに「動く」ものであるが、それは「相対的には動かぬ」と言う。この「相対的に動かぬ」とは、それぞれは動きながらもお互いを見るに個々として「自立」しており、「自己」は「他者」と分離され、「自己」として「他者」に対することの表現と考えることができる。それは、「原始子供」が「自分でぐんぐん生きていく力」を保障する基本的な様態であると見られる。これを筆者は、「相対的自立性」と名付け、小砂丘の教育思想の中心を為すエートスであるとしている。

それは教育という仕事に当たるに、その営為を行う自分自身においてドグマに陥ることなく、常に世界に向かって自らを開き、現実に対することを促す、「眼に見えぬ物へのまなざし」を持たせようとする、いわば教育の認識装置であると考えている。

(2) 小砂丘が「文章表現技術指導」を重視したことについては、転向やカムフラージュという理解の仕方を含めて、一定の議論がある。その詳細は飯田(2012)で取り扱っているが、筆者は小砂丘の「文章表現技術指導—生活指導」に対するスタンスは基本的に一貫しており、そこには彼の「自己」に加えての「他者」概念の獲得が大きく関わっていることを論じている。小砂丘は「文章表現」に「他者」概念を当てることで、「自己」の恣意的な発想や行動を、文章表現活動によって制御しようと考えている。小砂丘にとって「文章表現」というものは、それをういて自己を表現するに、必ずしも万全の対応ができるものではないとする認識があると思われる。

(3) 国分はこの「悩み」の論文で、以下の文言も記している。

高位高官の人や文人墨客が書くやうな、もつたいぶつた文や、うるほひや匂ひやさびのある文などはけつして求めはいたしません。村の子供として、又は大人としてかける範囲の、程度の素朴にして、明瞭なもので不足はありません。

ここに示されているのは、言語の使用階層とその使用言語との関連を指定してしまう、または無意識に追認してしまうことの表現である。それは、目の前の子供達が使う言葉は、「制限コード」(B. バーンステイン)によるものでよいとする理解にもつながりうる。この文言は、当時の国分が悩んでいたものの内実が「文章指導と生活教育の関わり」であったことを示すものであるが、その「悩み」を、言語の形式と内容を分けることで解決しようとしたことの帰結が、教育者が被教育者の使用言語の範囲を限定してしまうことになる危険性を示す例としても、これを読むことができるかもしれない。

引用・参考文献

- 飯田和明(2012)「小砂丘忠義の綴方教育における基本構造と思想」博士論文 筑波大学
乙訓稔(2013)「国分一太郎の生活綴方教育の理念」『実践女子大学 生活科学部紀要』第50号 実践女子大学
国分一太郎(1957)「抵抗の人間像とそのための教育運動—初期生活綴方運動と抵抗の人間

- 像』『講座 学校教育』第2巻〈日本教育の遺産〉所収 明治図書 pp.116-132
- 国分一太郎(1982)『現代つづりかたの伝統と創造』百合出版
- 「国分一太郎生誕100年記念ホームページ」<http://www.hinayusa.net/kokubun/>
- 今野三郎(1980)「北方教育社の教育運動」『教育学雑誌』日本大学教育学会
- 小砂丘忠義(1936)『文章記述の常識』文園社
- 佐内信之(2012.5)「国分一太郎の綴り方教育論—指導系統案を中心に—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』122 全国大学国語教育学会
- 菅原稔(2007)「国分一太郎著『新しい綴り方教室』の成立とその背景—戦後作文・綴り方教育成立史研究—」『岡山大学教育学部研究集録』第136号 岡山大学教育学部
- 太郎良信(2011)「国分一太郎による生活綴り方教育批判の検討—1936年から1939年における—」『教育学部紀要』文教大学教育学部第45集 文教大学教育学部
- 『綴り方生活』(1929)第1巻第1号～『同』(1937)第9巻第9号 文園社～郷土社
- 津田道夫(1986)『国分一太郎 転向と抵抗のはざま』三一書房
- 戸田金一(1986)「国分一太郎の文集作り」『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学』第36集 秋田大学教育学部
- 中内敏夫(1970)『生活綴り方生活史研究』明治図書